# 土左日記の引用表現をめぐる諸問題

半沢幹一

## はじめに

土左日記が、和文散文の最初の作品として位置づけられることに、大方は異論はないであろう。ただ、土左日記よりも早く、表記様式として漢字のみを用いていても、古事記が変体漢文ではなく、和文（倭文）の文章として書かれたものであるという考えもある（田中草大（二〇一六）「橋本進吉による「変体漢文」の定義と古事記の位置付け」『日本語学論集』一二、参照）。

いずれにせよ、初期の和文の文章にも、その中心を成す地の文だけではなく、引用される歌あるいは会話文が少なからず含まれている。従来、文章全体相互の文体の区別が問題にされることはあっても、地の文と引用文との区別・関係がどうなっているかについて論じられることはなかったように思われる。

もっとも、おもに平安時代以降の物語に関しては、和歌や物語の引用法（いわゆる本歌取りや本説取り）や、和歌と地の文との連接法（いわゆる歌文融合）などに関する議論は見られなくないものの、それらは引用全般の問題に関わるものではなく、土左日記における引用を取り上げた論も、寡聞にして知らない。

なぜ、あえて土左日記における引用を問題としなければならないのか。その理由（目的）は、三つある。

第一に、和文散文の成立過程を明らかにするためである。そもそも実際に、和文散文が引用文抜きには成り立たなかったのであるから、引用文が当該文章において、どのような位置付けにあるかを見極める必要があるのは当然であろう。同じ日本語とはいえ、地の文と、引用文である会話文や歌とは、位相・文体を異にするものであり、和文成立当初にあって、それらを統合して一つの文章として成り立たせるためには、伝統的な口承法とも漢文の表現法とも異なった、新たな工夫が求められたと想像される。土左日記は、それを探る手がかりとして、重要な資料であると考えられる。

第二に、古典作品における引用文の表現上の役割を明らかにするためである。引用は一般に、描写表現における具体化、説明表現における要約化を目的として行われる。文学作品においてはとくに前者に重点があるとみなされるが、それは古典作品でも同様であって、問題は、和文散文としてのジャンルを問わず、どのような場面で、どのような種類の表現が、どのような形で地の文に引用されるかによって、その効果のありようにも違いが見られるのではないか、ということである。

第三に、土左日記という作品の特徴を明らかにするためである。土左日記は日記本来の実用性を越えた内容・表現から成る作品であるが、その日記らしからぬ特徴という点に、会話文や歌の数多くの引用が密接に関わっていると考えられる。あくまでも実用日記として、その日の出来事を総括的に記録するためだけならば、いちいちの具体的な会話や歌までを引用するには及ばないはずである。にもかかわらず、必要以上とも思われるほどにそれらが引用されているのには、何らかの意図あるいは理由があったと想定される。

以上にもとづき、本論においては、まずは土左日記における引用全体のありようの記述に努め、次に比較資料として、土左日記の成立前後に位置する古事記と伊勢物語を取り上げる。対象とする引用文は、会話文と歌（古事記は歌謡、土左日記は短歌と俗謡、伊勢物語は短歌）の二種とし、思惟内容を示す心話文や慣用句などの引用は除外する。

引用文の整理にあたって、土左日記に関しては、作品全体における引用文の出現状況を中心とし、そのうえで他の二作品との比較に関しては、引用文の直前・直後の地の文の表現形式に注目し、いずれも引用文全体の様相と、会話文と歌との異同を見てゆく。

基本テキストとしては、三作品とも、小学館新古典文学全集本を用いる（ただし、本論引用に際しては、私意により表記を改めたところがある）。また、引用と表記様式との関係を見るために、真福寺本古事記、青谿書屋本土左日記、御所本伊勢物語の、それぞれの写真影印本も使用する。

# 1　土左日記における引用の様相

## 1-1　引用文の分布

土左日記に引用されている会話文は四九例、歌は六〇例、合わせて一〇九例であり、歌の引用が会話文の引用より三割程度、多い。これらが五五日間の記述の中にどのように分布しているかを見ると、左の一覧のようになる（「会」は会話文、「歌」は歌、「計」は両者の合計の引用数、「行」は各日のテキストにおける引用行数／全記述行数）。

**〔月日別の引用数一覧〕**

| 月　日 | 会 | 歌 | 計 | 行 |
|---|---|---|---|---|
| 12月21日 | 0 | 0 | 0 | 0/8 |
| 12月22日 | 0 | 0 | 0 | 0/3 |
| 12月23日 | 0 | 0 | 0 | 0/5 |
| 12月24日 | 0 | 0 | 0 | 0/3 |
| 12月25日 | 0 | 0 | 0 | 0/3 |
| 12月26日 | 0 | 2 | 2 | 4/13 |
| 12月27日 | 2 | 4 | 6 | 11/32 |
| 12月28日 | 0 | 0 | 0 | 0/3 |
| 12月29日 | 0 | 0 | 0 | 0/3 |
| 1月1日 | 2 | 0 | 2 | 3/8 |
| 1月2日 | 0 | 0 | 0 | 0/2 |
| 1月3日 | 0 | 0 | 0 | 0/2 |
| 1月4日 | 0 | 0 | 0 | 0/4 |
| 1月5日 | 0 | 0 | 0 | 0/2 |
| 1月6日 | 0 | 0 | 0 | 0/1 |
| 1月7日 | 7 | 3 | 10 | 16/37 |
| 1月8日 | 0 | 1 | 1 | 1/8 |
| 1月9日 | 0 | 3 | 3 | 8/34 |
| 1月10日 | 0 | 0 | 0 | 0/1 |
| 1月11日 | 1 | 2 | 3 | 7/25 |
| 1月12日 | 0 | 0 | 0 | 0/3 |
| 1月13日 | 0 | 1 | 1 | 2/10 |
| 1月14日 | 0 | 0 | 0 | 0/6 |
| 1月15日 | 0 | 1 | 1 | 2/7 |
| 1月16日 | 0 | 1 | 1 | 2/8 |
| 1月17日 | 2 | 2 | 4 | 7/14 |
| 1月18日 | 0 | 3 | 3 | 5/19 |
| 1月19日 | 0 | 0 | 0 | 0/1 |
| 1月20日 | 1 | 2 | 3 | 7/25 |

| 月　日 | 会 | 歌 | 計 | 行 |
|---|---|---|---|---|
| 1月21日 | 2 | 2 | 4 | 10/21 |
| 1月22日 | 0 | 2 | 2 | 4/12 |
| 1月23日 | 0 | 0 | 0 | 0/2 |
| 1月24日 | 0 | 0 | 0 | 0/1 |
| 1月25日 | 2 | 0 | 2 | 2/2 |
| 1月26日 | 2 | 2 | 4 | 7/20 |
| 1月27日 | 1 | 2 | 3 | 5/10 |
| 1月28日 | 0 | 0 | 0 | 0/1 |
| 1月29日 | 4 | 3 | 7 | 10/21 |
| 1月30日 | 0 | 0 | 0 | 0/10 |
| 2月1日 | 3 | 2 | 5 | 7/20 |
| 2月2日 | 0 | 0 | 0 | 0/1 |
| 2月3日 | 0 | 1 | 1 | 2/6 |
| 2月4日 | 3 | 3 | 6 | 10/17 |
| 2月5日 | 8 | 5 | 13 | 22/45 |
| 2月6日 | 1 | 1 | 2 | 4/10 |
| 2月7日 | 1 | 2 | 3 | 5/14 |
| 2月8日 | 1 | 0 | 1 | 1/7 |
| 2月9日 | 3 | 4 | 7 | 11/31 |
| 2月10日 | 0 | 0 | 0 | 0/1 |
| 2月11日 | 1 | 1 | 2 | 3/10 |
| 2月12日 | 0 | 0 | 0 | 0/1 |
| 2月13日 | 0 | 0 | 0 | 0/1 |
| 2月14日 | 0 | 0 | 0 | 0/2 |
| 2月15日 | 0 | 0 | 0 | 0/5 |
| 2月16日 | 3 | 5 | 8 | 9/40 |

これによれば、引用のある日が二九日、まったく引用のない日が二六日と、ほぼ半々になる。ただし、引用のない日の半分の一三日分は全記述行数が一行か二行しかないので、引用がないのも当然といえるが、一〇行ある一月三〇日や、八行ある一二月二一日にも、引用はまったく見られない。

引用のある二九日分について、引用数ごとの日数を示すと、

一例：六日、二例：六日、三例：六日、四例：三日、五例：一日、六例：二日、七例：二日、八例：一日、一〇例：一日、一三例：一日

となり、一例から一三例までの幅がある。

日数としては、一例～三例が各六日ともっとも多く、これらだけで全体の六割以上を占める。いっぽう、最多の引用は一三例で、二月五日であるが、この日の記述量は最大の四五行である。続く一〇例の引用がある一月七日は、第三位の記述量、八例の二月一六日も、第二位の記述量というように、引用数の上位の日は全体の記述量も多い。

引用行数も、ほぼ引用数に対応していて、最多一三例の二月五日が二二行、第二位の一〇例の一月七日が一六行、七例の二月九日と六例の一二月二七日が一一行、七例の一月二九日、六例の二月四日、四例の一月二一日が一〇行と続き、引用行数が七行以上の日はすべて三例以上の引用がある。割合で見ても、上位の二月五日、一月二一日、一月二九日、一月七日などは、全記述行数の半分近くを占め、引用文の比重が大きい。

引用のある二九日分のうち、会話文と歌の両方の引用があるのは、六割近くになる一七日、会話文のみの引用が三日、歌のみの引用が三日であり、四例以上の引用がある一一日はすべて会話文と歌の両方が見られる。逆に言えば、会話文のみ、あるいは歌のみの引用の場合は、すべて三例以下ということであり、会話文のみの引用は二例が二日（一月一日、一月二五日）、一例が一日（二月八日）、歌のみでの最多の三例が一月九日、一月一八日の二日である。

会話文自体の最多引用数は二月五日の八例、次は一月七日の七例、以下四例が一月二九日と二月一六日の二日、三例の二月一日と二月四日の二日、と続く。歌のほうでは、最多が四例で、一二月二七日、二月九日、二月一六日の三日、三例が一月七日、一月九日、一月一八日、一月二九日、二月四日、二月五日の六日、となっている。

引用の有無の連続性を見てみると、引用する日がもっとも長く連続するのは⑩二月三日〜二月九日の七日間の一回、次は四日連続が一回（6一月一五日〜一月一八日）、三日連続が三回（5一月七日〜一月九日、7一月二〇日〜一月二二日、9一月二五日〜一月二七日）、二日連続が一回（2一二月二六日〜一二月二七日）ある。

反対に、無引用がもっとも長く続くのが①一二月二一日〜二五日と④一月二日〜六日の五日間で、次が四日連続（⑪二月一二日〜二月一五日）、三日連続はなく、二日連続（③一二月二八日〜一二月二九日、⑧一月二三日〜一月二四日）がある。

右の丸（無引用日）と四角（有引用日）の数字順にして、連続しない日も加えて、並べてみると、

①五–2二–③二〔□〕④五–5三〔○□○□○〕6四〔○〕7三–⑧二–9三〔○□○□○〕⑩七〔○□〕⑪四〔□〕

のようになる。注目したいのは、引用の有無、連続の長短の変化である。5・6・7および9・⑩のように、有引用日が連続する場合も、それらの間には、一日交替に無引用日が入る形になっていて、引用が単調に続くことを回避しているように見える。

引用の全日にわたる分布を見ると、その半数を越えるのが三八日めの一月二九日、会話文の半数を越えるのが四〇日を経た二月五日、そして歌の引用の半数を越えるのが三四日を過ぎた一月二六日である。日記の中日が一月一九日（二八日め）であるから、どの引用も後半に偏っているということであり、とくに会話文は二月の前半（と最終日）に集中している。

### 1-2　各日における複数・連続引用

同日に複数の引用がある場合、それらがどのように現れるかを、引用が連続的と認められる場合とそうでない場合とに分けて、整理してみたい。「連続的」云々というのは、文の断続のような文法的な意味ではなく、場面の同一性あるいは発話や詠歌の一連性があるかないか、ということである。

一日の記述の中に複数の引用があるのは、全五五日のうちの二三日であり、全引用一〇九例のうちの一〇〇例（会話文が四九例中の四五例、歌が六〇例中の五五例）つまり九割以上に及ぶ。この中で、連続的と認められる引用があるのは二〇日分で、それらの日の記述における九三例の引用中の六四例、つまり複数引用の七割近くに連続関係が認められる。残りの三日、一月九日（三例）、一月二二日（二例）、二月一一日（二例）には、連続例は見られない。

たとえば、連続例のない一月九日の場合、歌の引用が三例あるが、「船にも思ふことあれど、かひなし。かかれど、この歌をひとりごとしてやみぬ」として、最初の歌の引用があり、すぐ後に「かくて、宇多の松原を行き過ぐ」とあって、次の場面に移り、そこの光景を「おもしろしと見るに堪へずして、船人のよめる」とあって、二つめの歌の引用があり、また「かくあるを見つつ漕ぎ行くまにまに」と時間的経過を示したうえで、「かく思へば、船子、楫取は船唄うたひて、何とも思へらず。そのうたふ歌は」とあって、最後の歌の引用がある、という具合で、引用相互の直接的な連続性がどれにも認められない。

連続引用のうち、歌のみが連続引用されるのが九回、会話のみが連続引用されるのが七回、そして歌と会話が連続引用されるのが一四回あり、歌と会話という組み合わせにもっとも多い。さらに、会話の三例連続引用が一回、歌の三連続引用が一回、歌と会話の組み合わせでの三連続引用が三回、同じく四連続引用が二回あり、三例以上の連続引用においても、歌と会話の組み合わせが目立つ。

日にち単位で見ると、連続引用される例がその日の引用例のすべてなのが、一二月二六日（歌二例）、一月二五日（会話文二例）、一月一八日（歌三例）、一月二七日（会話文一例・歌二例）、二月六日（会話文一例・歌一例）、二月七日（会話文一例・歌二例）の六日であり、どれも用例数は三例以下である。なお、会話文のみでの相当例は見られない。

以下に、これらの六日分の例を挙げる（引用の歌や会話文はそのまま示さず、歌には〔歌①〕、引用の会話文は「会①」のように、その種類と出現順を略記するにとどめる）。

〔例1〕 和歌、主の守のよめりける、〔歌①〕となむありければ、帰る前の守のよめりける、〔歌②〕。（一二月二六日）

〔例2〕 船も出ださで、いたづらなれば、ある人のよめる、〔歌①〕。この歌は、常にせぬ人の言なり。また、人のよめる、〔歌②〕。この歌どもを、すこしよろし、と聞きて、船の長しける翁、月日ごろの苦しき心やりによめる、〔歌③〕。（一月一八日）

〔例3〕 二十五日。楫取らの、「会①」といへば、船出ださず。「会②」というふこと、絶えず聞こゆ。（一月二五日）

〔例4〕 男たちの心なぐさめに、漢詩に「会①」などいふなる言のさまを聞きて、ある女のよめる歌、〔歌①〕。また、ある人のよめる、〔歌②〕。（一月二七日）

〔例5〕 かの船酔ひの淡路の島の大御、みやこ近くなりぬといふを喜びて、船底より頭をもたげて、かくぞいへる。〔歌①〕。いと思ひ

のほかなる人のいへれば、人々あやしがる。これが中に、心地悩む船君、いたくめでて、「会①」と、いひける。（二月六日）

〔例6〕 かかれども、淡路専女の歌にめでて、みやこ誇りにもやあらむ、からくして、あやしき歌ひねり出せり。その歌は、〔歌①〕。これは病をすればよめるなるべし。一歌にことの飽かねば、いま一つ、〔歌②〕。この歌は、みやこ近くなりぬる喜びに堪へずして、いへるなるべし。「会①」と、悔しがるうちに、夜になりて寝にけり。（二月七日）

〔例1〕は、歌のその場での応答、〔例2〕は、歌①と歌②が唱和で、歌③はそれらに触発されての詠歌、〔例3〕は、連続的な発話、〔例4〕の会①は実質的には発話というより詩句の朗詠であろうが、それと、その反応としての詠歌、〔例5〕は、歌と、それに対する感想の発話、〔例6〕は、連続的な詠歌と、それらに対する感想の発話、のように、引用文相互に強い連続性と、場面としてのまとまりが認められる。

もっとも引用例数の多い二月五日の記述を見ると、会話文八例のうち、次に示すように、各二例ずつの連続引用が三回（計六例）、それぞれ発話の応答として、記述の後半に集中して見られるのに対して、歌の五例はそれぞれ単独で引用されている。

〔例6〕 かくいひつつ来るほどに、「会①」ともよほせば、楫取、船子どもにいはく、「会②」といふ。（二月五日）

〔例7〕 楫取のいはく、「会⑤」とは、いまめくものか。さて、「会⑥」といふ。（二月五日）

〔例8〕 楫取、またいはく、「会⑦」といふ。また、いふに従ひて、いかがはせむとて、「会⑧」とて、海にうちはめつれば、口惜し。（二月五日）

なお、連続引用の中には、次のような特殊なケースも見られる。

〔例9〕 かくいひつつ行くに、船君なる人、波を見て、「国よりはじめて、海賊報いせむといふなることを思ふうへに、海のまた恐ろしければ、頭も白けぬ。七十路、八十路は、海にあるものなり。〔わが髪の雪と磯辺の白波といづれまされり沖つ島守〕（歌①）

揖取いへ」（会②）。（一月二一日）

〔例10〕ここに、人々のいはく、「これ、昔、名高く聞こえたるところなり」（会①）「故惟喬親王の御供に、故在原業平中将の、〔世の中に絶えて桜の咲かざらば春の心はのどけからまし〕（歌①）といふ歌よめるところなりけり」（会②）。（二月九日）

〔例11〕「今日はみやこのみぞ思ひやらるる」（会①）「小家の門のしりくべ縄の鰯の頭、柊ら、いかにぞ」（会②）とぞいひあへなる。（一月一日）

〔例9〕と〔例10〕はともに、引用の会話文中に、さらに歌が挿入された例であり、〔例10〕と〔例11〕は、二つの会話文が表現上も直接連続して引用されている例である。

## 1-3　土左日記における引用の全体的特徴

以上の整理をふまえて、土左日記全体としての引用の特徴をまとめれば、バランス、変化、組み合わせ、という三点を指摘することができる。

第一のバランスというのは、まず、用例数として、会話文が四九例、歌が六〇例というように、会話文と歌のどちらかにとくに偏ることもなく、引用されているということである。また、引用のある日が二九日、引用のない日が二六日と、分布がほぼ半々であることも、バランスがとれているといえる。

第二の変化という点では、引用がある二九日間において、各日の記述量に応じて1例から13例まで用例数にばらつきがあること、また、引用のある日とない日とがある程度の連続において交互に現れることが挙げられる。

第三の組み合わせというのは、同日の記述における複数引用において、会話文と歌の両方が引用されることがもっとも多く、かつそれらが連続的引用となるケースがもっとも多いということである。

## 2　会話文の直前・直後の表現形式

### 2-1　土左日記における会話文

全四九例の会話文のうち、その直前の地の文に当該の会話文を導く語つまり引用マーカーがあるのが全体の三割近くの一四例である。具体的には「いふ」という動詞であり、そのうちの半分がク語法で七例（「いはく」六例、「いひけらく」一例）、これに準じる「いふやう」が一例、その他、「いふ・いひ出づ・いひいふ・いふべし・いふなり」（各一例）があり、これらは次の会話文に関わっていると判断される。

残りのうち、「楫取の申して奉る言は」や「問へば」「問ひければ」（各一例）も、次に会話文が来ることがある程度、予想されよう。他に、「歌主」「わかき童」「楫取ら」、「楫取らの」「聞く人の」（各一例）などがあるが、これらは、いずれも結果的には、次に来る会話の主体であることが分かるものになっている。

以上の他の、全体の半分以上になる直前表現には、そこで次の会話文と切れているいないにかかわらず、それ自体で次に会話文が来ることを予測させるものはない。

次に、直後表現であるが、会話文で一文が終わる三例を除く四六例のうち、「と＋動詞（句）」が三七例で、全体の八割以上を占める。その他には、「とて」が六例、「とは」が一例、「などいふなる言を聞きて」が一例ある。

「と＋動詞（句）」三七例のうち、「といふ」が二八例で、四分の三以上になり（「いひあふ」「うるへいふ」各一例を含む）、それ以外には、「問ふ」（二例）「祈る・悔しがる・さわぐ・嘆く・申す・もよほす」（各一例）であり、いずれも発話行為を伴うものである。

「と」という助詞は引用文を受ける働きをする語であるから、「とて」や「とは」も含め、土左日記における会話文の引用はそのほとんどが、直後の「と」および発話動詞によってマークされているといえる。

会話文と、その直前あるいは直後の地の文とが一文として結び付いているか切れているかの組み合わせを示すと、次のようになる（結び付いている場合は「、」切れている場合は「。」で示す）。

Ⅰ　地、「会話文」、地　：三〇例（六一・二％）

Ⅱ　地。「会話文」、地　：一六例（三二・七％）
Ⅲ　地、「会話文」。地　：　二例（　四・一％）
Ⅳ　地。「会話文」。地　：　一例（　二・〇％）

Ⅰのパターンが半数以上で最も多く、Ⅱと合わせて、直後の地の文とつながっているのが全体の九割以上を占める。

Ⅰのうち、「いはく、「会話文」、といふ」のように、「いふ」の反復表現になっているのが六例、見られる（直前には「いひけらく・いふやう」を含む）。

Ⅱには、会話文の直前に「聞く人の思へるやう、「なぞ、ただ言なる」と、ひそかにいふべし」（二月一日）のように、会話文を含む一文があって、次の「「船君の、からくひねり出だして、よしと思へる言を。怨じもこそし給べ」とて、つつめきてやみぬ」と連続した発話とみなせるケースもある。なお、Ⅱには、会話文直前に「さて・されども」「今宵・漢詩に」という一語（一文節）のみが来る例も含めてある。

Ⅲの二例は、次のとおりである。

〔例1〕　かくいひつつ行くに、船君なる人、波を見て、「国よりはじめて、海賊報いせむといふなることを思ふうへに、海のまた恐ろしければ、頭も白けぬ。七十路、八十路は、海にあるものなり。　わが髪の雪と磯辺の白波といづれまされり沖つ島守　楫取いへ」。（一月二一日）

〔例2〕　ここに、人々のいはく、「これ、昔、名高く聞こえたるところなり」「故惟喬親王の御供に、故在原業平中将の、世の中に絶えて桜の咲かざらば春の心はのどけからまし　といふ歌よめるところなりけり」。今、今日ある人、ところに似たる歌よめり。（二月九日）

ともにすでに引用した例であるが、長い会話文が引用され、しかも中に和歌が引用されているという点で、異例である。さらに〔例1〕はこの会話文の引用で一日の記載が終わっている点、〔例2〕は二つの会話文がそのまま連続している点でも、特徴的である。

Ⅳの一例は、次のとおりである。

〔例3〕男ども、ひそかにいふなり。「『飯粒して、もつ釣る』とや」。かうやうのこと、ところどころあり。（二月八日）

この例は、地の文と会話文とが各一文を成す形式となっているが、実質的には一文における、意図的な倒置表現とみなすことができる表現である。

## 2-2　古事記における会話文

古事記に引用された会話文は、総計三四二例である（二重引用、すなわち会話文の中に引用された会話文の数は含めない）。そのうちの三三四例、全体の約九八％において、会話文の直前に、発話行為を表わす動詞（句）のク語法が用いられている。つまり、古事記における会話文の引用はそのほとんどが、直前のク語法によってマークされているということである。

ク語法の内訳は、「言〔云・曰・謂〕（い）はく」（「言ひしく」を含む）が最も多く、一三九例（四二％）、「詔〔宣〕（のりたま）はく」（「詔ひしく・詔はしむらく・詔はしめしらく」を含む）が八二例（約二五％）、「白〔奏〕（まを）さく」（「白ししく」を含む）が八一例（約二四％）、「問（と）はく」（「問ひしく」を含む）が一九例（約六％）、「告（の）らさく」（「告らししく」を含む）が一一例（約三％）、その他（「詔（の）り別（わ）きしく・詔（みことのり）せしく・詛（とご）はしむらく・請（こ）はく・語（かた）りしく・語（かた）り別（わ）きしく」各一例）が六例である。このうち、「詔〔宣〕（のりたま）ふ」や「白〔奏〕（まを）す」など、半分以上に待遇性を帯びた動詞が用いられている。

例外となる八例は、「次に・是に・故」（各一例）という接続詞、「皆」（二例）という名詞、「見て・以て・如くして」（各一例）という動詞句である。

直後表現としては、三四二例の会話文のうち、それで一文が終わる一例を除いた三四一例すべてに対して、直後に助詞「と」＋動詞（句）が続いている。ただし、使用テキストによれば、そのうちの三〇〇例が、それ自体に対応本文のない補読である（ちなみに、補

読された当該動詞（句）はすべて会話文直前の発話動詞表現の反復である）。

テキストの「凡例」には「本書に掲げた訓読文は、当時の常識的な読み方を追究し、一応一つの読み方に絞って示した」とあり、会話文直前の本文を会話文直後で再読するという方法もあったかと考えられる。

直後表現に対応本文が認められる四一例を見てみると、「と言〔云〕ふ」（「云ひ進む・言ひ動（とよ）む」を含む）が一四例で、直前と同様もっとも多く、以下、「と白〔奏〕（まを）す」が九例、「と詔（のりたま）ふ」が四例、「と事依〔言因〕（ことより）す」が四例、「と告（の）らす」が二例、その他が八例（「と＋問ふ・乞ふ・詔（の）り別（わ）く・期（ちぎ）る・覚（さと）す・患（わづら）へ泣く・男建（おたけ）び為（す）・詛（とご）はしむ」）であり、直前に比べて、用例数は少ないものの、補読例とは異なり、動詞のバラエティーが認められる。また、この四一例のうち一二例に、「と」と動詞（句）との間に「如此（かくのごとく）」という指示表現が挿入され、直前の会話文が指示されている。

会話文と直前・直後の地の文との切れ続きのパターンを四種に分けると、各用例数は次のようになる。なお、直後表現の補読例も含める。

Ⅰ　地、「会話文」、地　：三三九例
Ⅱ　地。「会話文」、地　：　二例
Ⅲ　地、「会話文」。地　：　一例
Ⅳ　地。「会話文」。地　：　〇例

割合を示すまでもなく、会話文が直前および直後の地の文に含まれて一文を成す例が圧倒的に多い（ただし、直後の補読表現三〇〇例を認めないとすると、会話文で一文が切れることになり、Ⅲのパターンが最多となる）。

Ⅰのうち、直後に対応本文が認められる四一例に関して、直前・直後の表現の対応関係を見ると、約半分の二〇例において、動詞（句）の反復が見られる。主なものとして、「云はく、「会話文」、と云ふ」が九例、「白く、「会話文」、と白す」が六例である。

Ⅱの二例は、次のとおりである（カッコ内は、巻とテキストの頁数）。

〔例1〕 是に、兄宇迦斯、鳴鏑を以て、其の使を待ち射返しき。故、其の鳴鏑の落ちたる地は、訶夫羅前と謂ふ。「待ち撃たむ」と、云ひて、軍を聚めき。（中・一五一）

〔例2〕 故、熊曽建が家に到りて見れば、其の家の辺にして、軍、三重に囲み、室を作りて居りき。是に、「御室の楽を為む」と言ひ動みて、食物を設け備へき。（中・二一九）

〔例2〕には、会話文直前の地の文とつなぐ「是に」という語が見られるが、〔例1〕は、テキストでは会話文から改行表示してあって、直前の地の文とは切れている。またどちらにも、直前に会話文を予告するマーカーがない。

Ⅲの一例は、次のとおりである。

〔例3〕 爾くして、答へて白ししく、「会話文①」と、如此白して、出雲国の多芸志の小浜に、天の御舎を造りて、（略）火を欙り出だして云はく、「会話文②」。故、建御雷神、返り参ゐ上り、葦原中国を言向け和し平げつる状を復奏しき。（上・一一二）

該当箇所は一八行にも及ぶ一文であり、地の文の中に会話文が二つ引用されている。会話文①はⅠのパターンに相当するのに対して、Ⅲとしての会話文は②のほうであるが、テキストでは、その直後に「と云ふ」という補読がされず、五行にわたる会話文を、カギカッコには入れず、改行表示して、他の会話文とは別扱いにしている。

## 2-3　伊勢物語における会話文

伊勢物語全一二五段において引用されている会話文は、四二例である。この他に、土左日記や古事記には見られなかった書簡文の引用が一一例あり、その直前には「文に」（一例）「いひおこす」（一例）、直後には「と書く」（三例）「といひやる」（二例）などという、独自のマーカーとなる表現があるいっぽう、「といふ」（五例）という、会話文の場合と同じ表現もある。

伊勢物語には、会話文それ自体として異色な表現が一例、次のように見られる。

〔例1〕 いかでこの在五中将にあはせてしがなと思ふ心あり。狩し歩きけるにいきあひて、道にて馬の口をとりて、「かうかうなむ思ふ」といひければ、あはれがりて、来て寝にけり。（六三段）

異色なのは、会話文中の「かうかう」という指示表現である。形式としては、その場の発話を直接的に引用しているように見えるが、文字どおりの「かうかう」では通じがたい。これは現場指示というより、当該段の先行する地の文に書かれている内容を指し示す文脈指示である。このように、地の文を前提として、会話文を簡略にする方法が伊勢物語には見られる。

さて、会話文の直前表現を見てみると、マーカーとみなせるのは、次のわずか二例である。

〔例2〕 それを見て、ある人のいはく、「かきつばた、といふ五文字を句のかみにすゑて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。（九段）

〔例3〕 親王ののたまひける、「交野を狩りて、天の河のほとりにいたる、を題にて、歌よみて盃はさせ」とのたまうければ、かの馬の頭よみて奉りける。（八二段）

ともに、歌題を提示する会話文の引用であり、〔例2〕の「いはく」というク語法は、伊勢物語の引用に関わる唯一の例である。

直前にもっとも多いのは、会話文の主体を表わす名詞で、一二例（うち「男」五例）あり、その他は、動詞（句）+「て」が七例、動詞（句）+「ば」が四例などである。

会話文直後の表現としては、すべてが「と」という助詞を伴い、「といふ」（活用形や接続語の如何を問わない）という表現が二七例でもっとも多く、全体のほぼ三分の二を占める。「と申す」「とのたまふ」（各二例）という発話動詞も含めれば、これらでほぼ四分の三となる。他に、「とて」が七例、「と+合はす・問ふ・契る・叩く」が各一例ある。すなわち、伊勢物語における会話文引用のマーカーはほぼ、直後の「と」あるいは「とて」および発話動詞であるといえる。

会話文と直前・直後の地の文との切れ続きのパターン別の用例数は、次のようになる。

Ⅰ　地、「会話文」、地　：三五例
Ⅱ　地。「会話文」、地　：　七例
Ⅲ　地、「会話文」。地　：　〇例
Ⅳ　地。「会話文」。地　：　〇例

ⅢとⅣのパターンがまったく見られないというのは、伊勢物語における会話文の引用はすべて、直後の地の文とつながった形になっているということである。これは、前に示したように、かならず助詞「と」が来て、以下の表現に続くことを意味する。

Ⅱの七例のうち、次の一例を別にすれば、会話文直前の地の文の一文内に、次に会話文が来ることを示すマーカーは認められない。

〔例4〕〔歌〕。「などかくしもよむ」といひければ、（一〇一段）

この例は、歌の引用に続くもので、会話文中の「かく」という指示語が現場指示の用法であるとともに、文脈的にも直前の歌を指し示す働きをしているので、直前の歌自体は引用マーカーとはなりえないが、会話文との結び付きは強いといえる。

## 2-4　会話文引用の比較

まず、会話文の引用数を比較してみると、次のとおりである。

| | 会話文数 | 概算頁数 | 頻度（回／頁） |
|---|---|---|---|
| 土左日記 | 四七 | 四二 | 一・一 |
| 古事記 | 三四二 | 一八五 | 一・八 |
| 伊勢物語 | 四二 | 一〇二 | 〇・四 |

実数もさることながら、平均頻度を見ても、古事記の引用数がもっとも多い。ここでは示さないが、会話文の分量も考慮すれば、さらに古事記における会話文の比重は大きくなる。対するに、伊勢物語の引用数はもっとも少なく、段数から見ても、三段に一例という

程度である。これらに比べれば、土左日記はほぼ中間的な位置にある。

各作品の会話文直前の表現形式のありようを改めて示せば、次のとおりである。

土左日記では、会話文引用のマーカーとみなせる「いふ」という語があるのが全体の約三割、その半分がク語法である。古事記では、ほぼすべてに、「言はく」を中心とした、発話行為を表わす動詞（句）のク語法が引用マーカーとして用いられている。伊勢物語では、会話文の直前表現に引用マーカーとみなせるのは、わずか二例である。

以上より、三作品の会話文直前の表現形式を、引用マーカーという点から見れば、相違はきわめて明らかである。古事記においてほぼ定型であった「言はく」などのク語法によるマーカーが、土左日記では三割程度となり、伊勢物語ではほとんど消えてしまう、ということであり、その点において、土左日記は過渡的な様相を示しているといえる。

対するに、各作品の会話文直後の表現形式のありようをまとめて示せば、次のとおりである。

土左日記では、「といふ」を中心とした「と＋発話動詞（句）」が全体の八割以上を占める。古事記では、そのすべてに、「と言ふ」などの「と＋発話動詞（句）」が続く。伊勢物語では、「といふ」を中心とした「と＋発話動詞（句）」がほぼ四分の三となる。

このように、会話文の直後に関しては、三作品の間に大きな差はなく、「といふ」という、会話文を受け、その引用マーカーとなる表現がおおよそ定着していたということであり、土左日記のみの特有な点は認めがたい。

会話文の直前・直後との断続関係については、各作品の表をまとめると、次のとおりである。

| | 土左日記 | 古事記 | 伊勢物語 |
|---|---|---|---|
| Ⅰ | 地、「会話文」、地 | 三〇 | 三三九 | 三五 |
| Ⅱ | 地。「会話文」、地 | 一六 | 二 | 七 |
| Ⅲ | 地、「会話文」。地 | 二 | 一 | 〇 |
| Ⅳ | 地。「会話文」。地 | 一 | 〇 | 〇 |

三作品とも、Ⅰのパターン、すなわち、会話文と前後の地の文が連続して一文になるケースが主流であることに変わりはない。ただ、土左日記は、Ⅰの割合がもっとも低く、四パターンすべてに用例があり、さらにⅡの割合が高い、などの点が特徴的である。

以上より、土左日記における会話文を引用する際の表現形式に関する特徴をまとめるならば、その引用マーカーとしては、会話文直後の「と＋発話動詞（句）」を基本としながらも、その直前表現や、前後の切れ続きに関しては多様性を見せている、ということになろう。

なお、引用文と表記様式との関係を見ると、どの作品においても、地の文と会話文とを区別する方法はとられていない。

## 3　歌の直前・直後の表現形式

### 3-1　土左日記における歌

土左日記に引用されている歌、全六〇例のうち、直前ではほぼ半数の二九例が「歌」で終わり（「歌は」の二例を含む）、続いて一八例が「よむ」（「よめる・よめりける」を含む）であり、両者合わせて約八割が、次に歌の引用があることを明示するマーカーになっている。

直後表現としては、六〇例の歌のうち、四例が引用歌でその日の記述が終わるので、対象となるのは五六例である。その中で、半分近くの二六例が「と」という助詞であり、「とぞ」九例、「となむ」五例、「とや」二例（これらは、この形で文が終わる）、「といふ」九例、「とうたふ」一例と、続く。他に、指示語が一一例（「この」四例、「これ」「かく」各三例、「ここ」一例、コ系のみ）、接続詞が七例（「また」五例のほか、「さて」「かくて」各一例）、見られる。

つまり、土左日記では、歌の直後は、「と」という助詞が受ける形が主流であり、指示語を含めると、約七割において、歌とのつながりが示されていることになる。

会話文の場合と同様に、歌と、その直前・直後の地の文との関係のありようを示すと、次のとおりである。

Ⅰ　地、〔歌〕、地　：二九例（四八・三％）
Ⅱ　地。〔歌〕、地　：　一例（　一・七％）
Ⅲ　地、〔歌〕。地　：二五例（四一・七％）

Ⅳ　地。〔歌〕。地　：　五例（八・三％）

土左日記では、歌の引用に関しても、Ⅰ～Ⅳの四パターンすべてが見られる。ただし、ⅡとⅣはわずかであり、ⅠとⅢが拮抗していて、この二つのパターンで全体の九〇％になる。つまり、土左日記では、もっぱら歌が直前の地の文と連続して一文になる形で引用されているということである。直後の地の文とは、つながっている場合（ⅠとⅡ）と切れている場合（ⅢとⅣ）とで、ほぼ半々である。

歌の直前と直後の表現に、同義あるいは類義の語句の反復が見られるのが二八例と、約半分に見られる。中でも、直前で「よむ」、直後で「いふ」が一四例もあり、他に「よむ―よむ」と「いふ―いふ」が各三例、「いふ―よむ」が二例、「うたふ―うたふ」が一例あって、歌を詠む行動を表わす動詞の反復という点では共通している。

Ⅱの一例は、次のとおりである。

〔例1〕　まだ幼き童の言なれば、人々笑ふときに、ありける女童なむ、この歌をよめる。〔歌〕とぞいへる。（一月十一日）

直前の地の文にある「この歌」の「この」は、後方指示つまり次に引用される歌を指し示しているので、文は切れているものの、「よめる」とともに、歌引用のマーカーとして機能しているといえる。

Ⅳの四例は、次のとおりである。

〔例2〕　かかれど、この歌をひとりごとにして、やみぬ。〔歌〕。かくて、宇多の松原を行き過ぐ。（一月九日）

〔例3〕　七十路、八十路は、海にあるものなり。〔歌〕。楫取いへ」。（一月二一日）

〔例4〕　かの船酔ひの淡路の島の大御、みやこ近くなりぬといふを喜びて、船底より頭をもたげて、かくぞいへる。〔歌〕。いと思ひのほかなる人のいへれば、人々あやしがる。（二月六日）

〔例5〕　今、今日ある人、ところに似たる歌よめり。〔歌①〕。また、ある人のよめる、〔歌②〕といひつつぞ、みやこの近づくを喜びつつ上る。（二月九日）

〔例2〕と〔例4〕は〔例1〕と同様、それぞれ直前の地の文にある「この歌をひとりごとにして」の「この歌」、「かくぞいへる」の「かく」という指示表現が後方指示の用法として、次の歌の引用を予告している。〔例3〕は、すでに取り上げた例であるが、歌の直前と直後の地の文には、歌の引用に関わる表現は見当たらない。ただ、歌と直後の地の文との関係では、諸説あるが、「わが髪の雪と磯辺の白波といづれまされり沖つ島守」という当該歌への返答を楫取に求めたとすれば、内容的なつながりは認めることができよう。〔例5〕においてⅣに相当するのは歌①であるが、その直前の「歌よめり」も、歌②の直後の「といひ」も、二つの歌を一緒に扱っての表現と見ることができる。

## 3-2　古事記における歌

古事記に引用された歌は一一二例あり、そのうち一一一例もが「曰（い）はく」という「曰ふ」のク語法の形で訓まれ、残り一例も「白（まを）さく」である。さらに、「曰はく」一一一例のうち、七七例が「歌ひて曰はく」、二七例が「歌に曰はく」のように、そのほとんどが引用に先立って「歌」であることが明示されている。

歌直後の表現としては、指示語が五九例、接続詞が四七例と、ほぼ二分される。

主たる指示語としては、「爾（しか）くして」一八例、「此（こ）の」一三例、「如此（かく）」一一例、「是（ここ）」八例、「此（これ）」七例であり、全体としてはコ系の近称が目立ち、前方指示の用法として、直前の歌そのもの、あるいは歌を詠むことを指し示している。

いっぽう、接続詞としては、「故（かれ）」二二例、「又（また）」二〇例、「即（すなは）ち」五例、の三語に限られる。接続詞は前後の文の関係の仕方自体を示すものであるから、地の文か歌の引用かという直前の文の位相・文体の違いには直接、関与していない。

古事記における引用歌と、その直前・直後の地の文との関係のありようを示すと、次のとおりである。

Ⅰ　地、〔歌〕、地　：　○例
Ⅱ　地。〔歌〕、地　：　○例
Ⅲ　地、〔歌〕。地　：一一二例
Ⅳ　地。〔歌〕。地　：　○例

結果は見事なまでに、Ⅲの一パターンしか見られない。つまり、古事記における引用歌は、直前の地の文に続き、直後の地の文とは切れる形で一定している。

直前・直後の地の文において、反復表現が認められるのは三二例、全体の約三割である。古事記では、引用歌の直前表現に、ほぼ固定的に、次に歌の引用があることがはっきりと示されているので、そのうえでなお直後表現に引用歌に関わる反復が見られるのは、次に示すように、その歌の出自や性格を示す必要がある場合か、「如此歌ひて」のように、次の展開に続ける必要がある場合か、である。

〔例1〕 爾くして、其の大前小前宿禰、手を挙げ膝を打ちて、儛ひかなで、歌ひて参ゐ来たり。其の歌に曰はく、〔歌〕。此の歌は、宮人振ぞ。（下・三二一）

〔例2〕 故、其の土雲を打たむことを明せる歌に曰はく、〔歌〕。如此歌ひて、刀を抜きて一時に打ち殺しき。（中・一五四）

### 3-3　伊勢物語における歌

伊勢物語の引用歌は二一〇例あり、そのうち、直前の地の文には、動詞（「いふ」「みる」「きく」など）+助詞（「て」「ば」「とて」など）が五七例、「よむ」（「よめる」「よみける」を含む）二六例、「返し」が二四例、「やる」（「いひやる」「よみてやる」を含む）一六例、「男」が一四例、「女」が六例などがあり、これらで約七割を占める。

この中で、「よむ」「やる」そして「返し」の場合には、次に歌が来ることが予想されるマーカーとなるが、全体の三割程度である。これらに対して、動詞+助詞の場合は、結果的にはそれが表す行為により歌が詠まれる経緯が示されていることになるが、その表現自体が歌の引用を予告するものにはなっていない。また、「男」や「女」の場合も、それが詠歌主体であることが、次に歌が引用されることによって、遡及的にそれと分かる表現である。

以上から、伊勢物語では、直前の表現形式が多様であり、それにともない、次に歌の引用が来ることを示す予告性が薄くなっているといえる。

直後の地の文として対象になるのは、二一〇例の約三割に及ぶ六五例の引用歌が、その章段の結尾に置かれているので（これ自体の

ありようも検討の価値があろう）、一四五例である。

この中で、半分以上の七六例の歌を、「と」という助詞が受け、「といふ」（三一例）「とよむ」（二九例）「とて」（一〇例）などのように接続する。他に、人名詞一七例（うち「女」七例、「男」二例）、「返し」一三例、指示語三例（「これ」）、接続詞六例（「また」）などがある。

伊勢物語における引用歌と、その直前・直後の地の文との関係のありようを示すと、次のとおりである。

Ⅰ　地、〔歌〕、地　：五〇例（二二三・八％）
Ⅱ　地。〔歌〕、地　：二九例（一三・八％）
Ⅲ　地、〔歌〕。地　：八一例（三八・六％）
Ⅳ　地。〔歌〕。地　：五〇例（二二三・八％）

伊勢物語には、Ⅰ～Ⅳの四パターンすべてが見られ、かつ用例も各パターンに分散している。直前と直後それぞれの切れ続きの傾向を見ても、直前では続くほうが、直後では切れるほうが優勢ではあるものの、顕著な傾向とまでは言いがたい。

直前・直後の地の文において、反復表現が認められるのは三二例、全体の約二割である。その中で目を引くのは、「～よめる。〔歌〕、とよみ～」のように、「よむ」を繰り返すのが一〇例あることくらいである。

以下には、各パターンにおける、歌引用のマーカーが認められる例を挙げる（マーカーには傍線を付す）。

Ⅰ　〔例〕女、返し、〔歌〕とよめりけるにめでて、ゆかむと思ふ心なくなりにけり。（一二三段）
Ⅱ　〔例〕男、泣く泣くよめる。〔歌〕とよみて絶え入りにけり。（四〇段）
Ⅲ　〔例〕物語などして、男、〔歌〕。この歌にめでてあひにけり。（九五段）
Ⅳ　〔例〕かの友だちにこれを見て、いとあはれと思ひて、夜の物までおくりてよめる。〔歌〕。かくいひやりたりければ、（一六段）

## 3-4　歌引用の比較

歌の引用数を比較してみると、次のとおりである。

| | 歌数 | 概算頁数 | 頻度（回／頁） |
|---|---|---|---|
| 土左日記 | 五九 | 四二 | 一・四 |
| 古事記 | 一一二 | 一八五 | 〇・六 |
| 伊勢物語 | 二一〇 | 一〇二 | 二・一 |

三作品の中では、伊勢物語が用例数も平均頻度数ももっとも多い。古事記は頻度が最低であるが、各歌（歌謡）の分量が和歌に比べると多いので、地の文に対しては、頻度以上の比重がある。これらに比べれば、土左日記は用例数は少ないものの、頻度としてはほぼ中間的な位置にある。

各作品の歌直前の表現形式のありようを改めて示せば、土左日記では、「歌」か「よむ」の両者を合わせて約八割が、次に歌の引用があることを示すマーカーになっている。古事記では、ほとんどすべてが「歌ひて曰はく」か「歌に曰はく」であり、引用に先立って「歌」であることが明示されている。伊勢物語では、直前の表現形式が多様であるだけでなく、直接には次に歌の引用が来ることを示さない表現のほうが多い。

以上より、三作品の歌直前の表現形式を、引用マーカーという点から見れば、古事記においてほぼ固定した「歌・曰はく」というマーカーが、土左日記では「歌」か「よむ」という表現にとって代わり、伊勢物語では定型的なマーカーがマイナーになる、ということである。その意味で、土左日記は、会話文と同じく、過渡的な様相を示しているといえる。

対するに、各作品の歌直後の表現形式のありようをまとめて示せば、土左日記では、「と」という助詞が歌を受ける形が主流であり、指示語も含めると、約七割において、歌とのつながりが示されている。古事記では、歌との内容的なつながりを示す指示語と、歌とは切れていることを示す接続詞にほぼ二分される。伊勢物語では、「と」という助詞が歌を受ける形が半分以上あるが、それ以外は多様な表現になっている。

歌の直後表現に関しては、古事記と他の二作品との間に大きな違いがある。引用マーカーの典型といえる助詞「と」が歌を受けるか受けないか、である。土左日記と伊勢物語を比べると、歌とのつながりを示す表現が土左日記のほうには多いといえる。

歌の直前・直後との断続関係については、各作品の表をまとめると、次のとおりである。

| | 土左日記 | 古事記 | 伊勢物語 |
|---|---|---|---|
| Ⅰ 地、〔歌〕、地 | 二九 | ○ | 五○ |
| Ⅱ 地。〔歌〕、地 | 一 | ○ | 二九 |
| Ⅲ 地、〔歌〕。地 | 二五 | 一一二 | 八一 |
| Ⅳ 地。〔歌〕。地 | 四 | ○ | 五○ |

古事記において一パターンのみだったのが、土左日記、伊勢物語になると、多様化かつ分散化していることが分かる。土左日記と伊勢物語では、伊勢物語のほうが歌で一文が終わる傾向が強いといえる。

以上より、土左日記における、歌を引用する際の表現形式に関する特徴をまとめるならば、その引用マーカーとしては、直前の「歌」あるいは「よむ」と、直後の「と」あるいは指示語という、前後の表現が機能している、ということになろう。

ところで、表記様式との関係を、各作品の影印本によって見てみると（次頁を参照）、地の文と歌との区別に関しては、次のことが明らかに指摘できる。

古事記における引用歌は地の文とまったく区別されることなく、本文として連続して記載されている。歌も地の文も文字は同じ漢字かつ同じ書体であるから、一見しての両者の区別は不可能である。

土左日記では、引用歌も地の文も同じ平仮名で連続的に記載されている。ただし、注意したいのは、■で表示したように、直前の地の文と歌の始まりとの間には一字分のスペースが設けられていることである。歌の終りと直後の地の文には、そのようなスペースは認められないが、少なくとも、歌の始まりに関しては、地の文と区別するための配慮がなされていたとみなされる（なお、この点については、すでに池田和臣（二〇〇二）「源氏物語の文体形成」（『国語と国文学』九三九）に指摘がある）。

伊勢物語では、引用歌の直前も直後も改行されてあり、しかも歌は一字下げになっているので、歌と地の文との区別は一目瞭然であ

〔真福寺本古事記〕

宇迦斯之獻大饗者志賜其御軍 此時歌曰宇陀能多加紀斯志
婆和那波留和賀麻都夜志婆 波佐夜良受伊須久波斯久
佐良佐夜流古那美賀那許波佐婆 多知曽婆能宇波那
久素 紀志婆 宇波那理賀那許婆佐婆 伊知佐佐比
能意富祁久素許紀陀婆志流 疊 引志夜胡志夜 若伊能基
布宣 字 阿 引志夜朝志夜 此者嘲咲者也 故其弟宇迦斯 此者宇陀主
其地幸行到忍坂大室之時 土雲 訓久 八十建 其室

〔青谿書屋本土左日記〕

このわしたちはうたをうたっている
うゝ 歌 みやこへとおもふ 平 ものゝ
しるはうつるあしたのあしはかり
けわやゝあるまよは 歌 あるんのゝ
わすれてるほなるもしら平つら 土
とゝめそうしてわけるとうしけゝ

〔御所本伊勢物語〕

はやうよりあつきをもあしと
見えけれど
歌 みのゝ山のひてなる道をだに
人の心のたくを入るつく 土
女おきわあくめてこゝとなしと

る。これ自体は現代の活字本とほぼ同じ体裁といえるが、もともとは歌集における、詞書・歌・左注の表記様式をふまえたものであろう。

## 4　会話文と歌の引用比較

### 4-1　土左日記における会話文と歌

直前の地の文については、会話文の引用の場合は、約三割に「いはく」などの形で「いふ」という動詞（句）のマーカーが見られる程度であるのに対して、歌の引用の場合は、約八割に「歌」あるいは「よむ」というマーカーが見られる。

直後の地の文については、会話文の引用の場合は、八割以上に助詞「と」というマーカーがあるのに対して、歌の引用の場合は、助詞「と」というマーカーが半分近くしかない。

以上からすれば、土左日記では、会話文を引用する際には、主として直後の地の文において、歌を引用する際には、主として直前の地の文において、引用マーカーが機能しているといえる。

直前・直後の地の文との切れ続きに関しては、会話文の場合も歌の場合も、すべてのパターンが認められるが、会話文は、直前とも直後ともつながって一文となるのが過半であるのに対して、歌は、そのパターンと、歌で一文が終わるパターンとに二分される。

### 4-2　古事記における会話文と歌

直前表現に関しては、会話文の引用の場合は、そのほとんどが「曰はく」などの発話動詞（句）のク語法によってマークされ、歌の引用の場合も同じく、ほぼすべてが「歌・曰はく」という表現によってマークされている。藤井貞和（一九九五）「古叙事としての文体」（『上代文学』七四）が、「平安和文の多くは会話文を有し、地の文と区別される」としたうえで、それに先立つ古事記では「会話文群（歌謡や諺を含む）が、地の文からはっきりと分かるように書かれていて、きわめてその点が印象に残る」というのは、とくにこの点に関係していよう。

直後表現に関しては、会話文の引用の際は、すべてが助詞「と」＋発話に関わる動詞（句）によってマークされているのに対して、歌の引用の際は、歌とのつながりを示す指示語と、示さない接続詞とに二分される。

以上からすれば、古事記では、会話文を引用する際には、その直前・直後の地の文において、歌を引用する際には、もっぱら直前の地の文において、引用マーカーが機能しているといえる。

直前・直後の地の文との切れ続きに関しては、古事記では、会話文の場合は、直前および直後の地の文に含まれて一文を成す例が圧倒的に多いのに対して、歌の場合は、直前の地の文に続き、直後の地の文とは切れる形で一定している。

### 4-3　伊勢物語における会話文と歌

直前表現として、会話文の場合は、その引用マーカーとなるものが二例しかなく、歌引用の際も、「よむ」や「返し」などの、マーカーになりうる語も四分の一程度しかない。

直後表現としては、会話文の場合は、ほぼすべてにおいて助詞「と」および発話動詞が引用マーカーであり、歌の引用の場合は、助詞「と」によってマークされるのが半分くらいである。

以上より、伊勢物語においては、会話文の引用はおもに直後表現の助詞「と」によってマークされるのに対して、歌の引用は直前の「よむ」や「返し」、直後の助詞「と」によってマークされるものの、どちらもそれほど強い傾向は持っていない。

直前・直後の地の文との切れ続きに関しては、会話文の場合はすべて、直後の地の文とつながった形になっているのに対して、歌の場合は、各パターンに分散している。

### 4-4　会話文と歌の引用の比較

以上をふまえて、三作品における、会話文と歌の引用に関する特徴・傾向をまとめると、次頁の表のようになる（「直前」「直後」の○は、引用マーカーが顕著、△は、それが優勢であることを示し、「断続」の○は、特定のパターンがあること、△は、その傾向が見られることを示す）。

| | 直前 | | 直後 | | 断続 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 会 | 歌 | 会 | 歌 | 会 | 歌 |
| 土左日記 | | ○ | ○ | | △ | △ |
| 古事記 | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ |
| 伊勢物語 | | △ | ○ | △ | ○ | |

三作品を比べてみると、古事記が会話文と歌とに共通して、地の文における引用表示性がもっとも強く、かつどちらの断続の表現パターンも定型化しているのに対して、伊勢物語では歌よりも会話文のほうにそれが目立ち、土左日記では会話文と歌のどちらにも、地の文における、ある程度の引用表示性と表現パターンが認められるといえる。

ところで、井手至（一九五六）「和歌散文連接形式の変遷」（井手至（一九九五）『遊文録　国語史篇一』（和泉書院）第七篇第二章による）は、歌直前の地の文を、（イ）体言止め、（ロ）用言の準体句止め、（ハ）連用句止め、（ニ）用言の終止法、の四種に、歌直後の地の文を、A「と」が使用される形式、B「と」が使用されない形式、の二種に分けたうえで、本論で取り上げた伊勢物語と土左日記における地の文と歌の関係に関して、次のように指摘している。

伊勢物語については、直前では（イ）と（ロ）がほとんど、直後ではBがほとんどであることから、「歌語りの発展した単純、単一な構想の物語（説話）の集合である歌物語においては、なお、和歌がみずから自足性と独立性とを備えた表現として、単純な構想の物語の内容の中心をなすという性格をむしろ持ち続けていたということを示して余りあるものと思われる」（四一三頁）。

土左日記については、直前では（イ）と（ロ）が優勢であり、直後ではAとBに二分されることをふまえて、「『土左日記』の和歌が、歌集や歌物語に準じるぐらい、散文に対して高い地位を保っていたことを窺わせるようである」（四二〇頁）。

つまり、二作品とも、歌が地の文に対して「自足性と独立性」を保っていたということであり、このことは、後々の歌物語や作り物語・日記において、直前の（ハ）や（ニ）の表現および直後のAの表現の増加にともない、「地位の低下した和歌は、地の文である散文の引用文として、一般の会話（心話）文と同等に遇せられることとなった」（四一五頁）のと比べての指摘である。

このような指摘は、伊勢物語に関する調査結果は異なるものの、本論の論旨と矛盾するものではない。ただし、次の三点については、確認しておきたい。

第一に、和文散文として、古事記をどのように位置付けるか、第二に、地の文に引用される歌と会話文とをどのように関連付けるか、

そして、第三に、引用という現象をどのように捉えるか、である。

第一については、井手（一九五六）は、おもに平安朝の作品の和歌を問題としているので、古事記の歌謡が対象外であるのは当然であるが、歌ではなく、地の文たる和文散文のほうに主眼を置くならば、古事記も射程内に入れるべきであろう。古事記に引用される歌謡が、直前に「歌に曰はく」という表現をとるのは、(ロ)用言の準体句止め、に相当し、直後が一文として切れているのは、B「と」が使用されない形式、に該当するのであって、井手（一九五六）に従えば、古事記という散文における歌謡こそが、地の文に対して、まさに「自足性と独立性」を一貫して保っていたことになるのである。

第二については、先に引いた井手（一九五六）の「地位の低下した和歌は、地の文である散文の引用文として、一般の会話（心話）文と同等に遇せられることとなった」という論述からすれば、歌と会話文では、そもそも地の文に対する位置付けが違っていたことを前提としている。それが、伊勢物語や土左日記においては、なお維持されていて、歌は地の文よりも上位にあるのに対して、会話文は地の文に従属しているということになろう。

井手（一九五六）は、会話文の引用については論じていないので何とも言えないが、もし「連接形式」つまり本論で言う直前・直後の表現および両者との断続関係から導かれたものだとすると、古事記も含めた三作品において、歌と会話文の両者にそれほど大きな差があるとはみなしがたい。直前表現では、歌のほうに、直後表現では、会話文のほうに、特定の引用マーカーが認められるのであって、断続関係についても、伊勢物語で両者に多少の違いが見られる程度である。

井手（一九五六）の論述を支持しうるとしたら、その根拠はむしろ、表記様式のほうであって、とりわけ伊勢物語においては、地の文と連続表記される会話文と、地の文から改行一字下げで截然と区別して表記される歌とでは、おのずと位置付けが異なることを示している。その点、古事記や土左日記では、表記様式に関しても、違いは見られない。

第三については、散文を対象とするかぎり、地の文が質的にも量的にも主たる表現なのであって、あくまでもその中に位相・文体の異なる表現が含まれることを「引用」と言うのならば、歌であれ会話文であれ、引用文としての、従たる表現であることに変わりはない。問題になるのは、たとえ従属的な位置にあったとしても、その引用文が文章の当該文脈にとって必要欠くべからざるものか否かであり、それによって引用文としての価値が異なってくるということである。ただし、その評価は、解釈のしかたにも関わるのであって、

ただに連接形式という表現上の問題ではあるまい。

## おわりに

以上、土左日記を中心として、その引用の表現上の様相について、検討してきた。各章節で取り上げ、まとめとして指摘してきたことは、ここでは繰り返さない。ただ、詳説しなかった、引用とくに歌の表現形式と表記様式との関係については、触れておきたい。

同じく引用でありながら、会話文と歌とでは、表現形式上の差異が認められたが、表記様式としても、会話文が地の文と区別されることがなかったのに対して、歌のほうには区別が認められた。この、歌の引用に係る表記様式上の区別は、作品による表現形式上の違いと無関係ではなく、表記様式が表現形式のありようを担保していたのではないかと考えられる。

その端的な例が、伊勢物語である。表現形式として見れば、古事記や土左日記に比べ、歌の直前・直後の地の文は、表現自体も多様であり、歌との切れ続きからも、全体に引用表示性が弱いことを指摘したが、それは記載形式における画然たる区別があったからこそ、可能になったともいえる。

その対極に位置するのが、古事記である。漢字のみを連続的に使用する表記様式においては、それによる地の文と引用歌との区別は不可能であり、両者の区別を示すためには、表現形式において、引用直前に、会話文では「言はく」、歌では「歌に（あるいは「歌ひて」）曰はく」という定型を用いる必要があったと考えられる。このような定型表現があるから、表記様式上の区別をしなくても済んだということではあるまいが。

土左日記は、会話文と同様に、歌の引用に関しても、表現形式にしろ、表記様式にしろ、古事記と伊勢物語の中間的あるいは過渡的な様相を示している。ただ、引用の表記様式としては、漢字と仮名という違いはあれ、古事記に近く、歌の直前にはスペースを空けるという点にのみ、地の文と引用歌との区別が認められる。そういう表記様式でありながらも、表現形式としては、古事記のようなワンパターンの引用表示ではなくなり、また直後に、歌を「と」という助詞で受ける形が見られるという点では、伊勢物語のほうに近い。このように、表現形式と表記様式との間にギャップがある点において、土左日記は、古事記や伊勢物語とは一線を画している。

以上のことを、古代散文における歌の引用の歴史的な変化として捉えてみるならば、その表記様式の劇的とも言える変化（漢字から仮名、連続表記から改行表記など）にともない、表現形式も定型的な引用表示から、しだいに、その表示性の薄い、多様で、かつ密接な地の文との関係に変化したといえる。引用表示性が希薄になるということは、その分だけ、地の文と引用文との区別を渾然としたものにするということであり、このことは、歌を中心として考えれば、その価値の下落と見ることができるかもしれないが、地の文のほうから考えるならば、和文の文章における、地の文の強化、あるいは成熟化と見ることができよう。

本論冒頭に、土左日記における引用を取り上げる理由（目的）を三つ掲げたが、本論はその基礎となる記述・整理をとおして、いくつかの特徴を指摘し、ある程度の見通しを述べたにとどまり、それらの明快な解答を導くまでには至っていない。すべて、今後の課題としたい。